

土崎空襲

土崎は、第二次世界大戦末期の 1945 年、空襲により壊滅的な被害を受けた。港の近くにあった石油精製施設は、当時国内最大級の規模を誇っていたため、アメリカ軍の攻撃目標となった。空襲とその後 1 週間近く続いた延焼により、250 人以上が死亡、200 人以上が負傷した。

攻撃は 8 月 14 日の午後 10 時 30 分頃に始まり未明まで続いた。米陸軍航空軍第 315 爆撃団は 12,047 発の爆弾を土崎に投下した。132 機の爆撃機のほとんどは、ボーイング

B-29 スーパーフォートレス爆撃機で、広島と長崎に原爆を投下したのと同じ機種であった。

攻撃から 12 時間足らずで、昭和天皇（1901-1989）は日本の降伏を宣言した。これが第二次世界大戦における最後の空襲であった。

石油精製所の近くにあった 1 棟の倉庫は爆撃後も残った。2017 年にその建物が取り壊された際、損傷した鉄筋コンクリートの柱や天井梁の一部が土崎みなと歴史伝承館に移設された。

折れ曲がり、一部溶けた柱は、この悲劇の歴史を今に伝えている。